

浅間 一城の虹の輪（第6学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

現在、地球規模の環境問題や国際理解にかかわる問題が、日本社会においても喫緊の課題として認識されている。そのため、環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点からより質の高い生活を、次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる開発や発展を目指す、持続可能社会の担い手を育む教育が、近年注目されている。生活・総合のワーキンググループのまとめでも、現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しとして、持続可能な社会づくりの視点を加えている。それは、総合的な学習の時間（以下、総合学習）が、実社会や実生活、地域社会に関する課題を扱い、それらを探究的に学んでいくことで自己の生き方を考えることを目指す学習だからである。

そこで私は、持続可能な社会づくりに、積極的に参画しようとする態度につながる力を子どもに育むため、**体験的に学んだ知識を結び付けることを通して、対象の見方を更新する子ども**を目指す。「体験的に学んだ知識を結び付ける」とは、探究的な「見方・考え方」を働かせ、体験的に学んだ事実に知識を比較したり関係付けたりして、対象に関する概念的知識を形成していく過程である。「対象の見方を更新する子ども」とは、社会を形成する様々なひと・もの・ことが関係し合っているという事実をとらえることである。これは、持続可能な社会づくりの構成概念である「相互性」*1にあたる。このような学習を通して、対象の見方を更新した子どもは、社会にある様々なひと・もの・ことの中に、自分も位置付いていて、互いにかかわりながら構成されていることに気づき、持続可能な社会に積極的に参画しようとしていく。

これまでの実践では、体験活動それ自体に価値があるため、子どもは、感動したり驚いたり、疑問をもったりしながら、対象に対する様々な事実に知識を獲得してきた。しかし、概念的知識を形成することが難しかった。その原因は、体験活動を重視するあまり、問いの場面で、何に注目させるのか明確な手立てを講じてこなかったことにある。

そこで、自分の対象の見方と専門家の対象の見方にズレを感じさせ、追究の視点を明確にさせる。また、事実に知識を可視化させることで、子どもが比較したり関係付けたりしていくことができるように、整理・分析場面で思考ツールを活用させる。

このように授業を展開することで、目指す子どもの姿を具現する。

「相互性」*1：持続可能な社会づくりの構成概念の一つである。具体的には「AとBとCとD、様々なものがつながりあって形成されている」という概念的知識である。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○課題について探究的な学習を通して形成する概念的知識 ・持続可能社会づくりの構成概念の一つである相互性という概念	○実社会や実生活の中から問いを見だし、自ら課題を立てる力 ○妥当性を高めるために、多面的に自ら情報を集める力 ○収集した情報を比較したり関係付けたりして自ら整理したり分析したりする力	○探究活動の経験を実社会・実生活への興味・関心へとつなぎ積極的に社会に参画しようとする態度

3 主張する働き掛け

子どもは、繰り返し、対象と体験的にかかわることを通して、対象に対する魅力を感じている。また、対象を構成している、ひと・もの・ことを知識として獲得している。これらの知識を整理することで、それぞれが相互に関係していることに気づき始めている。ただし、対象の目に見える特徴など、表面的なものしか捉えていない状態であるため、形成されてきた概念的知識が、質的に高まっている状態とは言えない。

しかし、子どもは、体験的に知識を得て、いくつかのかかわりが見えてきたことで満足感や達成感をもつ。そして、「対象をずっと将来にわたり残していきたい。だから、対象の魅力を多くの人に伝えたい」という思いをもち、単元を貫く学習の目的を設定する（C0）。

このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

専門家の、学習対象に対する思いにふれさせ、気付いたことを問う。

2サイクル目の課題を設定するための働き掛けである。

専門家の思いとの比較から、対象を調べる必要性と視点を明確にさせ、課題を設定させるのである。

対象に深くかかわる専門家の思いにふれることは、対象を表面的な部分だけでとらえて語ろうとする子どもに、対象とさらに深く関わる必要性を感じさせるものである。そこで、専門家が対象に対する思いを話した後、子どもがとらえる対象や対象が抱える問題点の見方を揺さぶる資料を提示する。子どもは、対象に対してさらに興味をもつ。そのような子どもに、再び専門家から対象に対する事実を語ってもらう。子どもは、**対象の変化に着目し、自分の問題意識と結び付け考える**「見

方・考え方」を働かせて、情報を比較したり関連付けたりする力（②思考力・判断力・表現力）を発揮し、対象や対象が抱えている問題と自己の生き方を関連付けて、疑問をもつ。そのような疑問をもった子どもに、何について考えていきたいか問う。子どもは、**対象の変化に着目し、自分の問題意識と結び付けて考える**「見方・考え方」を働かせて、実社会や実生活から問いを見だし、自ら課題を立てる力を発揮して（②思考力・判断力・表現力）、対象や対象が抱える問題について、視点を明確にして調べてみたいと課題を設定する。

働き掛け2

学習課題に対する予想、解決するための方法を問う。

設定した2サイクル目の学習課題を解決するための探究の過程に見通しをもたせるための働き掛けである。

学習課題を設定した子どもに、それに対する予想を問う。この後の探究の視点とさせるためである。子どもは、対象を、これまでの生活経験や既習の知識と新たな視点で捉え直し、学習課題に対する予想を立てる。次に、その予想を解決するための方法を問う。すると子どもは、予想を調べるのに、適切な方法を考える。このようにして、**原因と結果に着目し、自分の問題意識と結び付けて考える**「見方・考え方」を働かせ、妥当性を高めるために、多面的に自ら情報を集める力（②思考力・判断力・表現力）を発揮する。予想と方法を考えた子どもは、探究の過程に見通しをもち、主体的に活動に取り組みようとする。

働き掛け3

コアマトリクスを提示し、調べて分かったことを整理させる。

課題解決に必要な知識を可視化、操作化しながら整理・分析させ、対象について獲得した事実に知識を概念的知識に高めることを促すのである。

学習課題を解決するため、体験的に学びながら情報を収集した子どもに、整理・分析を促す発問をする。すると子どもは、複数の情報から対象を多角的にとらえようとし、コアマトリクスでの整理・分析を選択する。そして、調べてきたことを観点を設けて整理・分析する。そのような子どもは、**原因と結果の関係に着目し、自分の問題意識と結び付けて考える**「見方・考え方」を働かせ、収集した事実を比較したり関連付けたりして自ら整理したり分析したりする力（②思考力・判断力・表現力）を発揮し、知識を概念化させていく。つまり、相互性という、持続可能社会づくりの構成概念を形成する（①知識・技能②思考力・判断力・表現力④協働性⑤ツール活用能力）。

働き掛け4

将来にわたり対象を残していくために、何を伝えることが大切か問う。

課題解決を促すための働き掛けである。

本単元を貫いてきた目的に立ち返らせ、何を伝えることが大切か問う。子どもは、**原因と結果に着目し、自分の問題意識と結び付けて考える**「見方・考え方」を働かせ、探究の過程で形成した相互性の概念を発揮して対象を再度とらえ直す。そして、**体験的に学んだ知識を結び付けることを通して、対象の見方を更新する子ども（Cn）**となる。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、対象と人々の生活のつながりに着目し、対象を将来にわたり残していくためには、対象と人々の生活の新たなつながり方を創造することが大切であると考えることができたかどうかを、ワークシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け1から、探究的な「見方・考え方」を働かせているかを、発言や学習活動の様子、ワークシートから検証する。
- ③ 働き掛け1から、想定した資質・能力を発揮しているかどうかを、発言や学習活動の様子、ワークシートの記述などから検証する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (6月)「わたしたちのいがた未来ビジョンー伝えたい! 渦と人のつながり」(25時間)
- (2) 中間検討会 (9月)「わたしたちのいがた未来ビジョンー創りたい! 渦と人のつながり」(25時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月)「これがわたしのいがた未来ビジョン」(20時間)